

令和2年度 北九州市発達障害者支援地域協議会 議事録

- 1 会議名 令和2年度 第5回 北九州市発達障害者支援地域協議会
- 2 開催日時 令和2年10月12日(月) 19:30～21:00
- 3 開催場所 WEB会議 (Microsoft Teams を使用)
- 4 出席者
 - (1) 委員 (敬称略)
中村貴志、倉光晃子、天本祐輔、尾首雅亮、森本康文、シャルマ直美、森永勇芽、伊野憲治、森山謙治、國友信次 計10名
 - (2) 事務局
精神保健福祉課長 安藤卓雄
 - (3) 基調講演講師
シャルマ 直美
角田 かおり
- 5 会議次第
 - (1) 委員紹介
 - (2) 基調講演
北九州市教育委員会 スクールカウンセラー シャルマ 直美 氏
北九州市教育委員会 指導第二課 スクールソーシャルワーカー 角田 かおり 氏
 - (3) 意見交換
テーマ「学齢期の支援(子どもと家族に対する多職種チーム支援)」
- 6 会議経過(意見交換)

○気付きについて

【委員】

特別教育相談センターで実施している就学相談、教育相談は、スクールカウンセラー(以下、SC)やスクールソーシャルワーカー(以下、SSW)との連携が必要不可欠であり、これまでも多くの事例で連携を行い、支援に繋がった経緯がある。

シャルマ氏の講演の中で「気付いたときが支援の好機である」という発言は共感できる。しかし、支援が必要な家庭に対し、保護者の価値観も様々で、支援を必要としない考えの保護者がいた場合、課題を顕在化させて気付かせることも必要になってくる。そうやって気付いてくれた保護者は特別教育相談センターへ相談に来ている。

保護者の価値観、家庭環境が多様化している中で、それに合わせて、気付きを待つ、または、気付かせるべきなのか、どちらで対応すべきか迷うことがある。

講師2人はそれぞれどのように対応するかお尋ねしたい。

【シャルマ氏】

どちらもタイミングがあると考え。保護者に対し、発達障害の特性を持っている子どもがいることを話し、反応を見て、話を深めていくこともある。しかし、拒否反応を示して、その後の相談への抵抗感にならないように気を付けている。

過去の事例から、発達障害の特性があるかもしれないことを伝えて、教育相談や就学相談の存在を教えることで、保護者が気付いて、次のステップのきっかけになった例はある。

一度の説明で気付いてもらうことよりも、複数回説明することで気付いてもらえることが多い。

【角田氏】

S S Wの場合は、学校の教員でなく、外部の人間のためか保護者は耳を傾けてくれる。

S S Wの役割は顕在化している課題よりも隠れている課題、ニーズを掘り起こすことが役割と考える。各家庭に関わる中で、保護者が気付いていない子どもの行動、目に見えない行動、気になる行動を言語化して伝えることで、子どもが困っていることに保護者に気付いてもらい、そのタイミングで相談機関を紹介することで次の支援に繋げることがS S Wの役割と考える。S Cは学校に行く日が限られているが、派遣型で活動しているS S Wは、学校、家庭と時間を調整して、タイミング良く支援することができるため、メリットと考える。

○共有ツールについて

【委員】

保護者に自発的に気付いてもらうことを大事にしたい反面、教育として関わられる時間が限られるため、気持ちばかり焦っていること感じた。

気付きに繋がる促しを繰り返しアプローチするためには、教育の一方向からでなく、多職種の連携の中で、あらゆる方向から続けていくことが、大事だと考える。

義務教育期間という限られた時間で答えを出そうとするので、保護者のゆっくり気付いていきたい気持ちとずれが生じているのではと感じた。継続的な支援のためには多方面からアプローチして、息の長い、焦らない関わりが必要なことだと気付かされた。

多職種で連携する場合に、共通言語を持って同じように理解していくことが大事と考える。その一例がS S Wが使用しているアセスメントシートのジェノグラムと考える。どのようなものであれば問題を共有できるのか、この場で議論、検討していきたいと思う。

【委員】

多方面からのアプローチ、チームを組んで支援するうえで、共通言語、あるいは具体的にどういうツールを共有していくことができるのか。講師2人にお伺いしたい。

【角田氏】

日本全国で共通しているツールであれば、知らない人は勉強すれば共有し易いと思うが、多職種がチーム支援を行うにはジェノグラム※1・エコマップ※2の部分は必要と考えていて、先ほどS S Wが使用しているアセスメントシートを紹介したが、あれは学校ベースで作っており、地域で共有できるツールがあれば良いと考える。

※1・・・3世代以上の家族の人間関係を図式化したもの。

※2・・・本人を中心として、その周辺にある社会資源（家族、兄弟姉妹、友人、近隣住民、医師、各種関連機関など）との相関関係を、ネットワークとして表現した地図のこと。

【委員】

私は教育の場に身を置いているため、学校を中心に考えてしまうが、支援する子どもを中心として、その家族以外でキーパーソン（保護者が心を開いている人、相談できる人）がシートに記入されていれば、保護者との相談が行き詰ったときにその方の助けを借りることで支援はし易くなるのではと考える。

【シャルマ氏】

私の過去の事例で、ある生徒が教室で無理をして笑顔でいたことを、楽しそうにしているから学校生活が大変ではなさそうだという見方をされたことがあり、本人が目に見えない部分で無理していることを共有ツールで共通理解することは難しいと感じた。

一方で、行動は共有し易いため、行動に焦点を当てると、共通理解し易いと思う。

そのため、共通理解が難しいこともあるということを理解したうえで、共有ツールを活用する必要があると考える。

【角田氏】

S S Wが使用しているツールには、行動面に特化した項目がなく、その場合、別のツールを使用するため、確認するツールが増え、関係者の負担が増えていく難しさがある。

関係者が見やすいようにキーパーソンをエコマップに盛り込むようにしているが、どうしても家族関係や学校関係者の情報に偏ってしまいがちになる。そのあたりを地域の関係者やキーパーソンの部分に目を向けて作成すると、S S Wが使用しているツールでも外部の多職種の方にも共有してもらいやすいと思う。

○小・中学校の支援方針について

【傍聴者】

シャルマ氏にお尋ねしたい。

小・中学校で良い思い出があり、そのまま大人になるのが一番良いと思うが、小・中学校でひどい目にあっても、大人になったときに一人前になれていれば、私としては良いのではないかと思っている。

小・中学校の方針自体が単一思考（こうでなければいけない、こういう状況にはこうしないといけない）になりすぎているのではないかと思う。日本は特にその傾向が強いと感じており、海外では、あれもいいね、これもいいね、と許されることが日本では、こうじゃないとダメという風になっていると感じるがいかがか。

【シャルマ氏】

これは発達障害に限らず、人がどういう教育を受けていくか、どういう価値観の中で子どもに接するかという、大きな議論の中身だと思う。

私自身はご質問があったとおり、あれもいいね、これもいいね、と人が生きていく中では、こうでないといけないということはないと、小・中学校のときに多様な生き方をお互いに認め合う、大人たちが示していくことができれば素晴らしいと思うが、私自身がS Cの立場で小・中学校の方針にものを言う立場ではないと思う。ただし、ご質問のとおり多様な生き方を大人も見せるし、多様さの価値を子どもたちに伝えていくことは大切だと思う。

【傍聴者】

続いて、角田氏にお尋ねしたい。

学校で対応すべきこと、病院で対応すべきこと、SSWが関与すること、この3つで子どもたちは救われるのか。

【角田氏】

救えると思って支援しているが、絶対に救えると断言できないのが現状で、上記の3つにプラスして、地域の関係機関の手が必要だからこそ、多職種チーム支援が必要だと思っている。

個々で対応しても救えると思っていないので、そこは皆で手をつないで支援できるような輪をつくる働きかけをSSWはやっているつもりだが、相談支援事業所等が担っている場合もあり、どこが舵取りをして、うまく機能させる役割分担を図ってチーム支援をすることが本日のテーマだと思っている。

○SSWの役割、気付きについて

【委員】

学校レベルでいろいろな取り組みがなされてきたことは、私の子どもが学齢期のときに比べたら大きく変化したなど感じる。特に、SSWの役割は話を聞いていると重要な役割を担っていると感じる。

ただし、疑問なのは、例えば発達障害支援センター「つばさ」では引継ぎ書として、サポートファイル「りあん」を作成するなど、いろいろな取り組みがされている。それをどういう風に踏まえているのか全く見えてこない。年齢を重ねた子どもがいる親からすると学齢期はある意味では人生のほんの一部でしかない。

学校関係者に特に言いたいのは、上記を踏まえたうえで、いろいろと考えていかないと、一所懸命されているのは理解できるが、他の機関との連携ができていない。

SSWだったら、学校を出たあとにSW（ソーシャルワーカー）との連携をどうしていくのか、学校でも特別支援教育コーディネーター等、今までいろいろな職種の方がいたが、SSWとの関係はどうなっているのかというのは疑問である。

次に気付きの問題。親としても難しい問題であり、解決は難しいと思う。その問題も当事者家族とのずれがあり、困っている親がいれば、まずは具体的なやり方を示してみて、それが成功すれば、親とのコミュニケーションは取れると思う。親にどのように気付かせる、障害特性を理解させるというのは、私が保護者と接するときは、あなたの子どもは発達障害です。と頭から言わず、こうやったらうまくいくというような入り方が重要であって、議論がずれている印象を強く受けた。

【委員】

委員の方の話を聞いて、私は特に教師の関わりをもう一度位置づけないといけないと感じている。つまり、教師とSSWあるいはSCがどのように組んでいるのか。今、話をしている一つの場というのは、今は学校の中でどうかという話。それが段々と地域の中に広がりを見せるだろうと思うが、教師があまり見えてこないのも気になる印象を受けた。

【委員】

S S WやS Cは学校が対応困難な場合に対応するケースが多いということですが、保護者が困ったときに相談することができるのか、S S WやS Cの存在を知っているのか。保護者が相談し易くないと我慢してしまい、問題が大きくなって相談に来ることがよくあると思う。

保護者の立場から言うと、学校がまだ課題を認識していない、または学校とうまくいっていない場合にS S WやS Cに相談できることを知っているのと良いと思う。

○卒業後の支援について

【委員】

不登校の子どもが増えているデータが出ていたが、在学中は何らかの形で連絡、連携を取れると思う。しかし、卒業したあとの支援というのは、学校として考えられているのか。

【角田氏】

S S Wは義務教育期間の子どもにしか関われない問題があり、特別支援学校の高等部や、支援を受ける高校に進学した場合は、S S Wは支援できるが、卒後にずっと関わることはできず、基本的に中学校3年生で支援が切れてしまう。

その後に繋ぐ機関として、発達障害者支援センターつばさや障害者基幹相談支援センター等、子どもの課題に応じて学校や保護者と相談しながら、誰も支援する人がいなくなるようにしている。しかし、それもS S Wが関わることができた子どもに限られるので、課題を抱えながら、次の繋ぎがないまま卒業していく子どもも多いと思う。

【委員】

私も教師との関係が大事だと思う。療育センターも評価、診断をするが、診断したからどうなのと最終的に結び付けてもらうのは、学校だと思っている。そのときにキーパーソンとして期待したいのは、S CあるいはS S Wで、療育センターとしてもサポートしてもらっている。最終的に教師との関係、学校がどういう役割をもって子どもの支援に向かうのか、というところを考えていくために、S CやS S Wが活躍していると思うし、期待されていると思っているので、ご意見をお伺いしたい。

【委員】

保護者と良好な関係を築くことは非常に大事だと思っている。しかし、一担任にできることは限りがある。

教科指導、学級経営、集団を引っ張りながら個々の生徒に関わっていく難しさに向き合うのが教師の仕事である。S C、S S W、特別支援教育コーディネーターが校内にいたり、管理職の特別支援教育への理解が深まったりしている中で、一担任が心と向き合うような対面での活動はS Cにまかせたり、家庭環境にアプローチするときはS S Wにお願いしながら、担任が諦めずに関わっていくことが求められている。ただし、一担任が全てのことをまかなうことはできないので、だからこそ多職種連携であり、卒業した子どもとどこまで関わっていくのかについても、早めに関係機関と繋げて、卒業後もサポートしてくれる場を紹介することも必要である。

○SCの活動の補足について

【シャルマ氏】

SCは学校の中で活動しているので、担任の先生と協働で子どもや保護者に関わることは基本である。今日は、SCの活動を中心とした講演をしたので、先生とどういう風と一緒に取り組んだかということを実例の中で話したつもりではあったが、うまく説明ができていなかったと反省している。

保護者は担任の先生から勧められてSCに相談に来る割合が多いので、保護者の相談を受けたいという担任の先生と話したり、保護者との相談の場の最後に担任の先生に入ってもらったりしているので、担任の先生との協働は基本になっていることを補足させていただく。

【委員】

SSWの果たすべき役割に明確なものが無いと規定されていないなら理想的なものをやれば良いという気もするが、一方で国の規程の中で制限を受けていること（高校生を支援できない等）を打破していくことをしないと、国の政策の中でやっている印象しか受けないので、そこは積極的に考えていただきたい。

○その他

【委員】

学校の中で適応行動が取れないゆえに、個の問題がクローズアップされがちになっていることが問題だと思っている。角田氏が話していた関係性の中で起きている障害だということを理解したうえで、関係性を維持している人、構成する人は誰なのかということを考えてときに、そこは学校という場で子どもの意図、行動の背景をきちんと理解していく、それを落とし込んでいくことが大事な作業だと思うので、そういったことを協議会で確認できれば良いと思いました。

○本日のまとめについて

【委員】

今回の問題（学齢期の支援）は非常に重要なので、継続的に議論できればと思う。それと、ツールの問題について、既存のツールをもう一度しっかり見直して、なにが足りないのかを明快に詰める作業が必要。連携について、どういう連携が実際に取られていて、課題はどこにあるのか、掘り下げてみたい。

7 今後のスケジュール

1 1月下旬開催予定

8 閉会